

観光にストーリーの要素を

建築家、大川建築都市設計研究所代表

大川直治さん

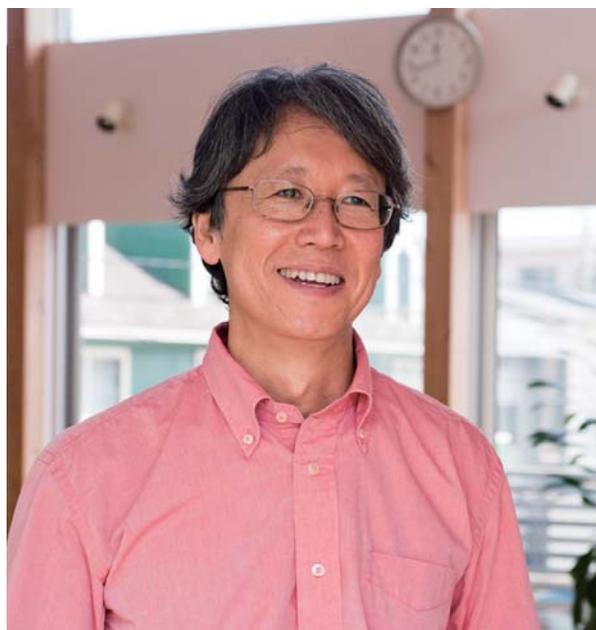
Naoji Ohkawa



静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

高いバランス感覚

大川さんは設計力やバランス感覚の良さで定評がある建築家として知られる。大学院を出ると、シドニーのオペラハウス設計に参加した建築家が主宰する事務所で勤務。日本初のシューボックス型のホールとして話題を呼んだ洗足学園前田ホールをはじめ、東急文化村オーチャードホール、鹿島建設が開発した東京イースト21などの大規模プロジェクトの設計を担当した。



経歴

静岡市清水区生まれ。県立清水東高校卒業。北海道大学工学部卒業、北海道大学大学院修了。1979年、株式会社MIDI総合設計研究所、92年、大川建築都市設計研究所を設立し代表に就任。61歳。建築業協会賞などを受賞、文京区の木造密集市街地整備促進事業建て替え相談員、日本建築家協会関東甲信越住宅部会長などを歴任。日本建築家協会登録建築家、日本建築学会会員。清水東高校関東地区同窓会副会長。

イベントに継続性を

かねて夢だった「住宅設計」を実現するため、東京イースト21が完成したのを機に1992年に独立。現在は主に都内の個人住宅の設計を手掛け、人に優しく品のある空間の設計を心がけているという。できるだけ多くの情報を得て設計に反映させるため「建築主さんの今後の生活スタイルや人生観なども伺っています」と対応はきめ細かい。

大学で都市計画を専攻したこともあって、まちづくりに関心がある。「例えば、金沢には武家屋敷や、寺町がある。兼六園をコアに、近代的な21世紀美術館、博物館などとうまく組み合わせて観光資源にしています。人を呼べる要素を自分たちで工夫してつくっている。静岡では保存ということをあまり聞きませんが、七間町とか両替町など昔の町名は残っている。何か生かされていない気がしますね」。

「観光の場合、多くは建物とか食事がメイン。ですからそれを大事にしたまちづくりが求められるのでは」と指摘。「過性の観光にしないため、歩いて回れるストーリーをつくり、その途中に食事ができる所を用意するとか。保存するものがなかったら、歴史が一番分かりやすいですから歴史に由来する物語を考えるとかなですね」。

また、単に食事処をつくるのではなく、「例えば清水次郎長の生家近くには当時の料亭風の建物を整備しお寺さんとセツトによる観光」を提案。東静岡周辺と草薙エリアでは、「双方は目と鼻の先ですから、芸術文化と運動施設の相乗効果を狙った継続的な全国イベントを提案してほしいですね」と話す。

東京での起業に当たっては、業界団体への加入を勧める。「建築で言えば技術的な話に限らず、さまざまな情報も得られる」とメリットを挙げた。

(文：長田義明、写真：大川さん提供)